

平成23年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立豊浦中学校 教諭 高畠 幸浩

- 1 派遣期日 平成23年8月29日（火）～30日（水）
- 2 研修先 滋賀大学教育学部附属中学校
所在地〒520-0817 滋賀県大津市昭和10番3号
<http://www.fc.shiga-u.ac.jp/>
- 3 研修内容

テーマ	教科等ならびに総合的な学習の時間における言語活動能力の向上を図るための、教科横断型「情報の時間」開設を核とした教育課程の開発
研修内容	文部科学省研究開発学校指定（二年度） 平成23年度教育研究発表協議会 紙と鉛筆から始める新しい情報“学”教育 一言葉と体験、習得と探究をつなぐ「活用する力」を高めるために— について公開研究発表会の視察及び教科別研究協議会、シンポジウム参加

学校教育の現場で表現活動を向上するためにはどうしたらよいか、さまざまな工夫が行われている。本校においても表現力の向上をめざし取り組んでいるので、言語活動の能力の向上と言う点で参考になると思い、研究開発学校の発表会に参加させていただいた。

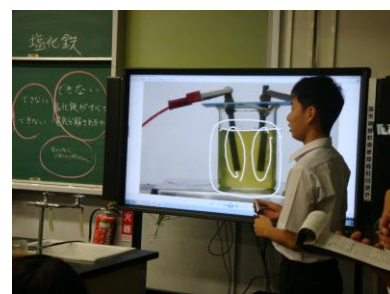
学校教育法第21条第4項に『情報』が新たに加えられ、新学習指導要領においても、21世紀にふさわしい学びとして、教育の情報化の基本政策を重視することになった。

本発表会における基調講演やシンポジウムでは、これまでコンピュータが教育現場にもたらした影響について説明があった。インターネットの発達により、生徒の学習にも質的な変化があったこと、指導者側も安易に生徒任せになりがちなこと、今後、国の情報政策でiPadなどの情報端末が生徒一人一人に与えられる可能性があることなどである。そこで、学校現場においてその情報教育をどう扱うべきなのか、総合的な学習の時間や各教科を通した実践研究を進めている。教育の現場がこれまで以上に『情報』の洪水にさらされ、ともすれば『思考過程』を見失いがちになる中、情報取得の道具（ツール）に踊らされない、真の情報教育が必要になる。『情報活用能力』とは、コンピュータ操作のスキルアップではない。『情報教育』もコンピュータ操作スキルアップ教育ではない。本学校では、学びの基本要素としての『読み・書き・計算』に『情報活用能力』を加えた4つが言語活動の基礎であるとしてとらえている。したがって、情報『学』教育は、すなわち情報活用能力をはぐくむことであるとして、各教科や総合的な学習の時間で実践研究を進めている。

総合的な学習の時間では、『情報』を系統的に指導し、例えば新聞二紙の高校野球の記事から人々が受ける印象の違いを考えさせたり、広告や街中のデザインを用いて、伝えるために必要な条件は何かなどを取り上げたりしていた。教科では、課題に対する考えをグループや全体で検討させる場面が多く、その際に道具として、最新の情報機器を積極的に使用していた。



滋賀大学教育学部附属中学校



デジタル機器を用いた発表



①理科



②保健体育



③数学



④学級活動

- 例
- ①理科 : グループの意見をホワイトボードに書き、デジタルデータでモニターに転送
 - ②保健体育 : バッティングフォームをデジタルデータに変換して、モニターで批評
 - ③数学 : 水槽に流入する水量の変化（映像）にグラフを重ねて作成
 - ④総合 : 演劇を発表するための意見の構造化（黒板左側・3要件Y型シート）

4 今後の課題（教育の現場での活用）

私たちが教育の現場で生徒と接する中で、コンピュータの普及とともに『思考・表現力』が弱くなってきていると感じていた。教育現場にコンピュータの導入や総合的な学習の時間が設定されてから、調べ学習は、インターネットでコピーアンドペースト（切り貼り）であり、わからないとすぐ答えを求める『自らの思考過程』のない学習活動に変わってきてしまったのである。今後、さまざまな教育機器が発達し、教育の現場にそれらが入ってくると思われるが、どのような状況でもコンピュータはツールとして使用し、思考活動や表現活動を補助するものとして考える必要がある。

教育の現場では、少々面倒でも自分の足で歩き調査したこと、自分の目で見たこと、聞いたこと、感じたこと、いわゆる五感を確かにした学習が必要なのではないかと感じた。そして、そうした過程で得た情報を整理し、『自らの思考過程』を発信していくことが、情報学教育といえる。

本校でも『表現力』を伸ばそうと各教科で試行錯誤しているが、それぞれの生徒の『思考過程』を引き出すことは容易ではない。また、思考活動へ導く指導も不十分である。しかし、これからの時代は、生徒自身が自分の経験や学びの中でとらえた『思考過程』をそれぞれの特性に合わせて『整理』し、それを求められた条件の中で発表していくことが必要であると考え。そして、それが真の表現力向上につながるのではないだろうか。

指導者は、発表の機会や形態、形式、道具の研究だけでなく、思考過程を整理するための工夫や活動が『表現力向上』のための手立てとして大切なのではないかと考えられる。また、国の『情報政策』により、近い将来、小中学校で『情報教育』が導入されることになると思われた。

「考える」

・考えることをブレイクダウン（具体化）する

比較する	順序づける	統合する
計画する	関係づける	関連づける
変換する	意味づける	など

学習指導要領にある「考える」言葉

5 感想

発表校の生徒の実態は、当然ながら高く、自分の五感でとらえた情報を言語に置き換える力、適切に資料を選択、分析する力などが高いと感じられた。生徒の気質も私たちの接している生徒とはまた違い、意見を積極的に発表していた。また、建物そのものはあまり新しくはないが、教育の現場にあると助かる最新の機器が多くうらやましかった。しかし、そうした機器もあくまで授業を円滑に進めるための道具であり、生徒の発表活動を支えるものになっていた。また、全教室にエアコンも完備しているので、夏休み明けの8月30日の発表であっても十分生徒は活動できていた。

今回、研究開発校を視察に行かせていただいたが、たくさんの先生方にこういう機会を提供できれば個人の指導力アップとともに、日本の教育をどうするのか意識が高まるのではないかと感じた。